

田口俊夫（元横浜市都市デザイン室）ヒアリング記録

2023年2月9日（木）午後2時～5時

スカイプで実施

インタビュアー・青木淳弘

田口俊夫プロフィール：1952年埼玉県浦和市生まれ、横浜市南区在住。埼玉県立浦和高校から早稲田大学理工学部建築学科に進学。同大学院在学中に、イギリスに留学しアーバンデザインを学ぶ。帰国後早稲田の大学院修了を経て、1978年に横浜市企画調整局都市デザイン担当として入庁。1991年に清水建設株式会社に転職して、教育コンサルタントを名乗る。2007年、横浜山手女子学園に転職し国際教育に従事し、続いて中央大学事務職員となり定年退職。2015年に友人たちとNPO法人田村明記念・まちづくり研究会を創設し、同NPOの副理事長を務める。

青木 すみません。お願いします。きょうは三つ大きく分けて伺いたいことがあるんですけども、最初は横浜市以前のお話、次、横浜市時代のお話、最後に現在の、横浜市以後とか現在のセルフイメージということで、大ざっぱにその三つに分けて伺いたいと思ってるんです。前に、といっても、もう5年ぐらい前になってしまうんですけども、話を伺ったんですけど、また振り返るという意味もあって、最初に横浜市以前のお話を伺えたらなと思います。そもそもいつ頃から都市デザインというものに興味を持ったのですか。

田口 都市デザインに興味を持ったのは大学の学部で在学していた時ですね。特に興味の方向性ははっきりしたのは3年生ぐらいじゃないかな。大学院には行こうと思っていました。というのは、なぜ都市デザインに興味を持ったかという、早稲田大学の建築教育に対するアンチテーゼとして、いわゆる単体建築をうまく設計する・しないということだけをやっているのかと。社会問題からいって、当時で言う「ミニ開発」。いわゆる田畑を簡単に埋め立てて、そこにどんどん建てていく。そういう住宅開発が盛んに行われ始めていた。所謂「スプロール」ですね。私が住んでいたのは埼玉県の与野という所だけど、まさにそういうのが周り中にたくさんあるわけですね。わが家が住んでいた所もそのはしりかもしれないけど。わが家はちょっとした丘の上の長屋で、非常に小さい家だったけど、それよりも低地の田畑を簡易的に埋め立てて、そういう住宅を造っていくのを盛んにやられていた。

だからそういう状況を、あれは鹿島出版会かな、『都市住宅』という雑誌があったんです。これはどちらかというと社会派的な都市計画を扱っていた。それを盛んに読んでいて。そこでも、そういうスプロール問題が取り上げられていた。そういう流れからいって、やはり都市デザインという、もう少し上の分野に取り組みなきやいけないんじゃないかと思った。だけど早稲田大学の建築教育では一切そういうことは語られていない。こんなことでいいのかというふうに思い、3年生の設計課題だったかな。あえてそういう郊外のスプロール開発

みたいなものを題材にして、そういうスプロールにちょっと工夫を加えてなんかできないかと提案したことがあるんです。大きな敷地に立派な建物を造るというのをみんな出して、こんな設計出しても評価してくれないだろうなと思いながら出したら、意外と評価された。社会的な目を持っていて、よろしいぐらいの評価でした。早稲田で教えている先生たちも、そういう視点を持っているのかなとは思いましたね。

それをしっかり勉強しようとしたときに、どこで勉強できるのか。この早稲田で勉強できるのかと思ったら、そういう先生たちはいないわけですね。やはり海外へ行ったほうがいいのかと、探してイギリス（注：University of Manchester, イングランド北部の都市マンチェスターにある歴史ある大学の大学院修士課程のアーバンデザインコース）に行ったというのが発端ですね。当時の都市デザインというのは二つの流れがあって、アメリカの都市デザイン。それとイギリスの。どちらかというとなアメリカのほうが元気で、アメリカのは民間開発主体の都市デザインというように見えていた。イギリスのはどちらかというとな、公共的な施策としてやってそうな印象だった。どちらかというとな、深くは知らないですよ。というふうに思っていた。

もう一つは単純に経済的なことで、アメリカの大学院は2年だけど、イギリスは1年なんです。我が家は自分が中学校に上がるまで極貧の生活で、その頃から母親が生命保険会社の外交員をやって徐々にどうにか生活が成り立っていった。父親は煙突屋で家庭風呂の煙突を掃除して日銭を稼いでいた。毎日真っ黒でした。小さい頃は川沿いの低地で少しの雨でもすぐに洪水になった。四畳半に家族5人で住み、台所も水道もない。家の外に台を出して母親が雨に濡れながら調理をしていた。そんな生活です。だから、学校でも父親の職業で、よくいじめられていた。そんな家の子がイギリスに留学してしまった。そんな物語です。つまり、1年なので割とコンパクトに勉強できそうだった。

現地に行って分かったんだけど、学生は圧倒的に社会人ですね。学部出てそのまま来たっていうのは結果的に私だけ。最初20人近くいたけど、どんどん減って、13人ぐらいになった。世界中から来ていましたね、世界は広いなって感じた。こんないろんな連中が。じいさんとか、おばさんもいたけど、こんな人たちが勉強しているのだから。すごいなって思いながら勉強を始めました。

ただし、英語ができない。英語のレベルがそのときはどのぐらいだったかな。講義の英語を聞いて、すらすら分かることは全くなかった。資料を何回も読むと何となく分かったけど、相当に辞書を引かないと分からない。でもよく行きましたね。本格的にアーバンデザインに興味を持ったのはそこからですよ。大学院に応募するときも、自分の問題意識を言って、日本のそういう都市状況を変えなきゃいけないんだということをアピールした。なかなか面白いやつじゃないかっていうことで拾ってくれたみたいですよ。

青木 もともとは建築ですもんね。最初に早稲田の建築に入られたときっていうのは、そこまで都市デザインとか、あるいは都市計画みたいなことっていうのは興味はなかったの

すか。

田口 現場の都市デザインを知ったのは入ってから。都市計画にも興味があつて、中学生ぐらいのときに学校図書館でたまたまブラジルの首都ブラジリアの計画の本を何となく見た。こんなことできるのかって面白いなって思った。俺もブラジルに行かなきゃいけないと思った。都市計画という分野は分からないけど、なんかこう都市をつくっていくっていうのかな。そういうのがあるんだなっていうのは分かった。かつブラジルみたいな所は新しい原野を切り開いていくのも魅力的だった。正確には何も理解してないけれど、やはりそういう方向をやりたいなということと、絵を描くのが好きだったからそういうこともあった。また。街を見たりするのが好きだった。高校のとき、よく自転車で全国各地を旅行した。輪行袋って言って、自転車をたたんで袋に入れて、京都に行ったり紀伊半島を一周したりとか、いろんなことをやっていた。

青木 そうだったんですか。その頃から何となく公的なのとか、公共的なものとか。

田口 そうゆうことになりますね。

青木 以前、どのぐらいの時期から都市計画っていうものに興味を持ったのかっていうのは伺ったことなかったの。

田口 ブラジルの話で、今でも思い出すけど、小学校の何年生だったかな。その当時、海外移住事業団っていうのがあって、海外移民が非常に盛んだった。東京の九段下に事務所があった。そこに小学校の同級生を連れて社会科かなんかの調べ学習かな、そこに行って、おじさんたちに「海外移住のことを知りたいんです」って言ったら、「君たちよく来たね」って。

青木 すごいですね。小学生にして既に都市とかそういうものに興味があった、あと絵もそうですね。すごいですね。小学生にして既に都市とかそういうものに興味があった、あと絵もそうですね。

田口 あと、小学校の時、毎年よく東京晴海（注：当時、晴海に国際展示場があった）の自動車ショーに行ってきたパンフレットもらって、それでそれを基に模型を作っていた。

青木 そうなのって小さい頃から何かありますね。今に至るような。

田口 あるよね。よく1人で行った。

青木 1人でですか。

田口 1人で電車乗って、バス乗って、小学生がさ。

青木 すごいですね。

田口 今から考えると、すごいな。

青木 それで都市デザインにつながってくるわけですね。田村明さんについて知ったというのは大学のときですか。

田口 田村さんのことは知らなかった。全く知らなくて。卯月盛夫さん（注：早稲田大学教授、元世田谷区都市デザイン担当、大学院卒業後にドイツで都市デザインと都市計画を学ぶ）が、私がイギリスから帰ってきて、早稲田の大学院に復学した。そこで先生たちが都市計画や都市デザインなんて教えられないから。唯一教えられる先生が1人いたのかな。大塚全一さんという土木の先生。首都高速道路公団の人だったのかな。今になって思うと。その人以外は都市計画というのはできない。ただし、建築の恩師がいて。

青木 武基雄さんですか。

田口 武基雄先生（1910/2005、早稲田大学教授、丹下健三と並ぶ日本の建築家）も教えていたけど、武先生は建築家なので、都市計画的な関心はあるけれど、失礼ながら都市計画の実務に詳しいとは思わなかった。だから研究室の中で勝手な勉強会、アーバンデザイン勉強会っていうのをつくって、院生たちを集めて勉強会をやっていたんだ。そこに1年後輩になるけど、卯月盛夫君がいて、卯月君と一緒に勉強会をやっていて、彼は結構勉強していた。彼は横浜に住んでいたのかな。今度、建築学会で講演会があって、そこに横浜市の田村明という人物が来て講演をする。「田口君、行かない？」って言われて。「それ、いつなの」って言ったら、ある日の夕方だと。イギリスに行く前からやっていたけど、近所にテニス同行会があって、そのテニス練習日に重なっていた。その日が雨だったら行くからと言っておいた。別に田村さんって知らないし。ちょうど雨になったので、それで行った。都市デザインとかなんて言っているから、イギリスで勉強したときのことを話すことがあるかもしれないと思って、イギリスで買った本を持って、聞きに行ったわけ。そしたら田村さんとお付き役で国吉直行さん（注：横浜市の都市デザイン担当、早稲田大学大学院を出て市に入っていた）がいた。

その話の前に、それも卯月君に聞いたのかな。どうも横浜で都市デザイン担当というのが盛んにやっているらしいよと。そこに武研究室の先輩の西脇敏夫さんという人がいるらしいと聞いていたわけ。そもそも日本で都市デザインなんかやっているのかと思った。当時、

日本全国いろんな所を見てみようと思っていたから、電話を入れて話を聞かせてください、と西脇さんに電話した。西脇さんの家かな。そしたら西脇さんが、「ああ、ああ」って言って、要領を得ない感じでさ。いつか来ていいよとか言ってくれるわけでもなく、「ああ、ああ」って言って、その話は終わっちゃってさ。話聞きに行けるのかな。どうなのかな分らないまま過ぎてったわけ。

そうしたら今度、田村さんというまさに横浜市の都市づくりの責任者が講演会をやる。あの西脇さんと同じところなのかなと思いながら行って見て、講演を聴いたら、結構しっかりやっていることが分かった。それで国吉さんに、私も早稲田の後輩で、イギリスでこんな勉強をしてきた。これが今イギリスで評判の本『エセックスデザインガイド（注：“Essex Design Guide” 郊外住宅開発に対する自治体 Essex 州による建築デザインコントロール）』です。もしご興味ありましたら、どうぞお読み下さいって貸したわけ。そしたら田村さんが「国吉君、それ借りて勉強しておきなさい」なんて言って。国吉さん、迷惑そうな顔して。こんなものを借りて誰が読むんだっていうぐらいの顔だった。

今度、向こうから電話がかかってきた。というのは、建築学会で田口という人間に会ったという話になって、西脇さんが彼から私が電話もらっていました。西脇さんは港北ニュータウンの仕事をやってから、継続的に市役所にいてくれっていう話になったばかりだった。西脇さんも新人といえば新人なんで、そんな話をどうさばいたらいいか困っていたらしい。イギリスから帰ってきたとか言っているけど、ずっと分かんないままそのままにしておいた。それを田村さんから直接言われて、すぐ呼びなさいという話になった。それで、私は横山市役所を訪問した。これがイギリスから帰ってきてからすぐだから、市に入る2年前ぐらいの話かな。

青木 その後はコンタクトとったり、試験受れたりいろいろあって、都市デザイン室に入るわけですね。

田口 そう。そのときに、岩崎駿介さんにも会って「田口といます」と挨拶した。岩崎さんがずっと後で言っていたけど、「なんだかゴツイ奴が来たな」っていうふうに思ったらしい。岩崎さんにそう評価されて光栄でした。そのときに、たまたま企画調整室に遊びに来ていた岡村駿さん（注：企画調整局都市科学研究室研究員）とも立ち話をした。

青木 そこで岡村さんが出てくるわけなんですね。

田口 うん。それで岡村さんに、将来的に都市デザインやりたいと思って、横浜も一つの候補でこれから全国を廻ろうと思っています。いろんな所に可能性があると思うので、いろいろと見て廻ります、ぐらい偉そうなことを言ったんだと思う。でも、本当にそういうつもりだったから。別に横浜でなくたって日本中いろんな所に可能性があるはずだし、横浜はもう

スタッフがいてやっているから、という発想ですね。そういう意味で、それよりも自分自身で始められるほうが面白いんじゃないかと思ったわけ。他の所、例えば自分が住んでいた埼玉県だとか、地方の大都市とか。神戸もそうだし、大阪だとか、九州のほうも行った。目ぼしい所、飛び込みで行った。みんなどこでも飛び込みで行っても、大体親切に対応してくれた。変な兄ちゃんが来たなと思ったかもしれないが、一生懸命話を聞いてくれた。みんな結論的には、うちの役所はまだ早いですなど。日本で言うと横浜ぐらいじゃないかなと。横浜に行ったほうがいいんじゃないの、という話になって。

どうするか考えている中で、東京大学都市工学科卒の北沢猛さんともう一人を、私が試験で入る1年前に公の募集をしないで特別枠で採った時代があった。ついでにもう一人、田口も採っちゃえと。田口君、市に来なよって田村さんから言われたけど、自分はまだ早稲田大学の大学院に戻ったばかりであと1年ちょっと研究したい。大学院を終える見込みをつけてから試験を受けて、ご縁があったら入りたいとお伝えした。内心、別にそんな難しい試験じゃないだろうと思って、受かるんじゃないかと思っていた。どうも田口は断つたらしいとなった。1年遅れて試験受けたら、ほとんどうまくできなかった。当然だよ、試験勉強していなかったから。

その当時、合格したのが5人で、例年より多く採った。実は5人のうち私が一番下、点数ですよ。上に鈴木君っていう東大の学部を出た人がいて、後で助役になったりする。もう一人は横浜国大の大学院出た人がいて、その間に2人早稲田の学部卒が挟まっている。私は点数的に下で、上の2人に言われたけど「あれって田口さんを採用するために点数下げたんじゃない」って。自分が辞めてから言われた。

青木 でもそれだけ逆に言うと、田口さんを採用したかったっていうことでもありますね。いずれにしても。

田口 ありがたいですね。そういう話を知らないでずっと偉そうなこと言っていたけど。でも係長試験（注：横浜市役所は試験を受けないと係長以上にはなれない）は1番だった。勉強の仕方、分かっていたから。徹底的に勉強して汚名を返上した。

青木 さすがですね。それで最初にいきなり都市デザイン室ですよ。入ったのって。

田口 それで1978年4月に企画調整局の都市デザイン担当に入ったんだけど、結局はもう政変（注：飛鳥田一雄革新市長から元自治省事務次官の細郷道一保守政権となった）だから。辞令をもらう時に、まだ細郷さんは正式に市長になってない。市長として登庁するのはちょっと後だったかな。辞令は3月ぐらいに助役からもらっている。入った途端に、市長は代わっているわけで。この細郷さんって誰なんだろうって思っていた。そもそも飛鳥田さんのことも、自分はほとんど知らないからね。飛鳥田さんのことを慕って入ったわけではさらさら

なくて、都市デザインを目的に入っているから。飛鳥田さんたちの革新自治体なんて言葉すら知らない。

青木 革新とかそういうのは関係なしに、とにかく都市デザインができるところを探していった結果、そうなったってことですかね。

田口 そう。全くそれに尽きるんですよ。その後に勉強していく中で、初めて分かるわけだから。だけど 政変があって市役所の雰囲気も変わった。これは結構やばそうだなってというのは分かってきたわけ。というのは企画調整局の位置付けが危うかった。企画調整局がなんなのかは、うすうす分かっていて、当然重要なセクションだっていうのは分かっていたけど。入った途端に企画調整局がへたすれば解体になって、アーバンデザインも解体になるかもしれない。自分は、入った途端にどうなっちゃうんだろうと思った。田村さんも当然のことで元気がない。都市デザイン室も元気がないし、どうなっちゃうのかしらって思って、これは外で勉強しておいたほうがいいと思って建築学会の研究会に顔を出したりした。まだ建築学会が有楽町にあった時代なんだけど、そこによく通いましたね。

そして学会の『建築雑誌』に、イギリスの都市デザインコントロールの紹介の論稿を連載した。そんなことをやって、あとは大学の研究室に遊びに行ったりして、あんまり仕事があるようではなかった。仕事がないって言った方がいいぐらいだった。唯一、もらった仕事が都心プロムナードの絵タイルの管理台帳を作る仕事だった。どこに何が埋まっているか、そういう台帳を作ってくれと言われて。そんなものがないんですかって言いながら、それが最初の仕事だった。そうこうしているうちに、武基雄さんが脳梗塞で横浜市大病院に入院した。田村さんがお見舞いに行く時、田村さんの専用車のどこの席に私が座っているのかよく分からなくて、どぎまぎしましたね。

病院で武基雄さんから、「田口君、いま仕事は何をやってんだい」って言われて、「特に何もやっていないんです。今、暇なんです」って言ったら、後で田村さんに怒られた。「田口君、そんなこと言っちゃ駄目だ。仕事は自分で見つけるものだ」と言われた。何しろ、自分で頑張んなきゃ駄目なんだって初めて怒られた。でも、政変になっちゃったのが悪いんじゃないかと思いつつ、もやもやとしていましたね。でも、プライベートでは北沢さんたちが高校の同窓生（注：神奈川県立緑ヶ丘高校）たちがつくっているテニスクラブに入れてもらって、仕事を終えてから本牧のテニスコートに集まって楽しく遊んでいた。奥さんも、その仲間ですね。なにしろ、埼玉から移って本牧にあるアパートで独り暮らしですからね。

青木 都市デザイン室に入ったばかりのとき。同時にやりたいことがあるけど、それが政変でなくなっちゃったから、自分で探しているというような時期だったわけですかね。建築学会に。

田口 まさにそういうことですね。これは辞めざるを得ないことになるかもしれないっていう気もあった。まさにその頃、SDの特別号（注：『スペースデザイン別冊 No. 11』鹿島出版会, 1978. 11. 20 でそれまでの横浜の都市づくりを「都市計画の実践的手法」として特集した）を、企画調整局の諸先輩たちは一生懸命作っていたわけだ。11月ぐらいだったかな、それが出来上がったから、打ち上げ会をやるから田口君も暇だろうから来なさいって。こういう人たちがこんな原稿を書いていることが分かった。そのときは本音の話を皆でしているわけ。でも何を言っているかよく分からなかったね。まだね、役所の内情が分からないから。ただし、そのときに覚えているのは、書くべき人が書かないで逃げたと。つまり、それを書く、新しい市長に睨まれると思う人たちがいて、書くべき人が逃げちゃったと言っていたのを覚えている。それは誰なのかな、とか想像した。

青木 そうでしたか。そういう中で田口さんも、その後、例えば調査季報に書くだとか、まち研に活動するとかいうふうになっていくっていうのは、その時期にできなかったというか、都市デザインを思い描いて入ったものがないという危機感があったから、せめて活動を広げようということ。

田口 自分でやるしかないもんね。だって上から下りてくるのがないわけ。だって田村さんの企画調整局は実質崩壊しちゃった。その後に局長になった人、僕は役所の人を知らないけど、相当小粒らしい。そうすると、どうも細郷というのは自治省の国の官僚で嫌なやつらしいとか、いうぐらいの雰囲気でしょ。私はどうしちゃっていいのかなって思った。そうすると国吉さんが頻りにデザイン室の何人かを誘って飯食いに行って、その後に、「田村さん暇だろうから、田村さんのアパートへ行っちゃおう」と言って、田村さんのアパートに行った。山下公園の目の前にある田村さんの公団住宅の隣に、自分の書斎用のマンションを持っていた。そこにみんなで رفتったりした。あるいは、そばのニューグランドホテルのバーで田村さんを囲みながら、これからどうなっちゃうんですかねっていう話を、国吉さんとか、北沢さんとかが中心になりながらやっていたね。私もくっついてって、どうなっちゃうんだろうな、と思いながら。そういう時代だったな。

青木 まちづくり研究会に入ったというか、あれ立ち上げたのは南さんとかが最初に始めたみたいな話は聞いたんですが。

田口 南学と仲原正治だね。

青木 そのお二人がやるみたいところで、田村さんはどのように入ったんですか。きっかけは。

田口 役所に入って2年目ぐらいじゃないかな、研究会に入ったのは。立ち上げた年の翌年ぐらいで、その年の後半ぐらいかな。どうも田村さんを囲んで勉強する自主勉強会があるというんで入って、それで実質すぐその運営を任されてずっとやっていたね。月に一回定例会を夕方からやる。2時間ぐらいやってから、田村さんを囲んで皆で飲みに行く。来月は何やるか、誰に話をしてもらうか、どうするかこうするかとか、そういう企画を相談しながら考える。大体、仕事時間中に電話かけまくって、いろんな人と雑談しながらやっていた。今度は彼に頼もうかねとか、そんなことをずっとやっていたね。

ちょっと話がそれるけど、役所の新卒者の宿泊研修で、県立の施設だったかな、その施設運営や研修のやり方にまで、新卒者たちから注文をつけた。分かりやすく言うと「反乱」を起こした。朝礼で今日の研修に向けて順番にそれぞれの心構えを言うのだけど、僕はレイバンのサングラスをかけて壇上に上がり「とてもこのようなやり方は承服できない・・・」と演説したりして。その時の仲間たちは「従順ならざる子羊たち」でしたね。その姿勢が市の中で権威主義への反抗につながっているわけですね。ただ、その時の市の研修所の係長や職員たちが、逆にそれからまちづくり研究会の活動を応援してくれたりした。面白い役所だね。

青木 何となく今のNPOのスタイルにも似たようなところを感じますね。雑談しながら、次これやろうみたいなことをアイデアとして膨らませていくという。

田口 そう、むしろ基本的に職員が語るようにした。偉い人に語ってもらうんじゃなくて、ちょっとでも担当者として問題意識を持って、自分で考えて語れと。それも田村さんの方針だからね。そこでみんなで議論することで、その業務の課題が何か、今後どういうふうにその担当者に対応していくべきかの気付きを目指した。最後に、田村さんが短くコメントするんだけど、それが鋭くて非常に為になった。それによって、みんなに「田村イズム」が身についたんじゃないだろうか。大変に勉強したし、かつ楽しかった。

青木 結構その活動は長くされてたし、人間関係もそれで広がったところはあるわけですね。

田口 全く私の人間関係のベースはそれですよ。それをつくったところが極めて大きいですね。

青木 今でもそのお付き合いがあるわけですね。南さんとか、遠藤さんとかもそうですけど。

田口 変な話、役所を辞めた後も、そのときの人脈が元になって更に広がっていくからね。

そうやって活動をする人は役所の外にもいろんな人脈を持っているから、えらく助かったとっていいかな。

青木 かなり重要な活動ですね。そういう意味でも。

田口 本気にやっているからね。お客さんで言っているわけじゃなくて、みんなで企画しながらやっているから、結構真剣だよ。もう一つ大きいのは、「田村一派」と思われても俺たちはいいんだ。別に俺たちは偉くなるつもりはないから、そんな反体制的な姿勢があるわけ。だから結構みんな元気だったよ。でも、結果として、みんなそれなりに偉くなったね。

青木 それはやはりユニークな活動だったんじゃないかなって思いますよね。そういう一定の広がりを持って反体制っていうか。

田口 そう。

青木 同時にその時期に、もちろんまち研の活動もしながら調査季報にも執筆しますよね。

田口 調査季報で発信しようとしたのは、「区の魅力づくり」というやつですね。あれの元は、岩崎駿介さんが長島孝一（注：AUR コンサルタント）さんと一緒にやった郊外部の歩行者空間調査なんだ。郊外部、いわゆる都心部以外だよ。都心以外の所で都市デザインをどう展開するか。その一つのキーワードが歩行者空間整備でやっていこうとして、調査を始めた。私が入る1年前ぐらい。田口君、それを担当して、発展的になんかやってみたらと。岩崎さんは、何をすればとは言わない。それで岩崎さんはそれを言ってから2年目ぐらいかな、辞めて国際連合に行っちゃった。

ちょうどその後に、内藤惇之（ナイトウアツシ）さんが岩崎さんの代わり都市デザイン担当副主幹になった。内藤さんも何やっていいかわからないから、田口君が好きなようにやってみたらとなった。もはや、企画調整局や都市デザイン担当を取り巻く情勢は全然好意的な情勢じゃないからね。もう針のムシロですよ。昔の飛鳥田・田村時代の遺物ぐらいのもんだからさ。それを私たちは、まち研の連中もそうだけど、企画調整っていうのは必要なんだと主張した。役所の主体性っていうのは、公務員が国向いてりゃいいってわけじゃなくて、やはり地方自治っていうのが大切で、かつ主体性っていうのも大事なんだ。それで企画調整っていうのも、ちゃんと使わなきゃいけないんだと考えた。

だけど政治が変わっちゃったから、僕はそれを具現化するためには、単なる歩行者空間というだけじゃなくて、他の何かを見つけるべきでないかと考えた。結局よりどころがなくなってしまった都市デザインと、よりどころがなくなってしまった企画調整を今度、区役所というフィールドと結び付けることによって、それができるんじゃないかと思いついた。だか

ら「区役所の企画調整局」という発想です。そういう形でやっっていこうと。それはちょうど細郷さんも分かってか、分からずかは別にして、何しろ区を強化しなきゃいけないと言いつつ始めていた。それは誰も否定できないわけだから。区を強化するっていうのは、区自身に企画調整力があるということが前提じゃないですか。それをまずは都市デザイン担当が、お手伝いしましょうと。そうしていくと環境も変わるし、大元の企画調整局の存在意義も出るんじゃないかと私は期待したわけ。

ところが、それをやるのは1人なわけですよ。1人で、都心周辺だから6区（南、港南、磯子、保土ヶ谷、神奈川、鶴見）。それを、区の企画調整ですなんていって活動するわけ、6区ぐらいあったら大変だよ。1日一つ行っても1週間かかっちゃうわけだから。区長が区長要望を事業局に出せる制度もできて、我が街はこうしたいとか、ああしたいとか、こういう特色を生かしていきたいとか言えるように徐々に変わった。だけど、そういう要望をつくるスタッフがいないわけだよ。具体的にその要望がどういうイメージかっていうのを、こういうイメージですってという絵も描かなきゃいけない。計画もしなきゃいけない。予算化もしなければいけない。それが6区ぐらいあるから大変なわけ。それを3、4年やったんだよね。そうすると、まったく仕事が大変な状況になってくるわけ。だって、ものによっては駅前広場もやるし、プロムナード事業なんてどえらい長いものもやるし、本も作るし、何でもかんでもやるわけだよ。

そうすると企画調整の他の人から、田口君ってなんか忙しそうだねって言われて。それは忙しいよね。昼間は区役所や現場そして事業局などに打ち合わせ行ったりして、帰ってくると夕方以降ずっと一人で作業するわけ。あの有名な「大テーブル」を作業用に使ったりして。予算付けのいろんな交渉までやるわけだけど、予算がついたら今度コンサルタントに委託できるけど、コンサルタントに出したってその進行管理やんなきゃいけないとか、やるのが山のようにある。それを内藤さんが、田口君っていうのは不思議な人間で、いろんな所（区役所や事業局）に行っって、いろんな仕事を発掘してくると言っていました。それはそうだよ、営業活動もやるわけだから。それを区の立場と結び付けたりして、今、道路局がこんなことやる、他の局がこんなことやる、やれそう。こんなことで困っているようだ。こういう予算を持ってるが、どう使っていいか迷っているらしいとか、そういう情報を発掘して、それを区レベルで事業化できるように企画する。そして、実現に向けて進行管理する。ただし、一人でね。それらの共通目標は、区の埋もれた魅力を発掘して具現化することなんです。いま、各区役所の区政推進課に「まちづくり調整担当係長」という部署があるらしいけど、この区の魅力づくりの発展形なのかな……。発想の原点は、あくまでも区役所が事業局をコントロールする、そんな気概ですね。

青木 1人で企画調整をやろうということなんですね。

田口 そうです。だから課長会とか部長会とかランク別に会議をやって事業をオーソライ

ズしていく。そういう会議をたくさん設定するわけ。会議の日程調整が大変で。当時の自分の手帳なんか見ると、びっしりいろんなことが書いてあるんじゃないかな。やったことをまとめてアピールしないといけない、言っているだけだと駄目だから調査季報にどんどん書くわけ。

青木 調査季報はそうした活動の、いわば宣伝媒体っていいですかね。

田口 そう。全くそういうことです。

青木 それが執筆の動機だったということで。今おっしゃったような一人企画調整活動という中で、思い入れのある、新本牧のまちづくりっていうのも、その活動の一つですか。

田口 違うんです。それが1982年に開催された「ワイラップ YLAP (the Regional Congress of Local Authorities for Development of Human Settlements in Asia and the Pacific)」だったんです。YLAPは、国連のESCAP（注：バンコクに本部がある国連の地域機関）の課長になった岩崎さんが細郷市長に仕掛けて、国連と横浜市の共催の自治体による都市づくりの国際会議だった。それを目標にして、企画調整機能の意義を再認識させるために活動した。そこら辺まで盛んに仕事をしたつもりです。1978年から4年ぐらいずっと必死の思いで。そしたらYLAPが始まる直前に機構改革されて、企画調整局はお取りつぶしになった。なんだよって、という気持ち。あんだけやっても駄目かと。それで都市デザインは都市計画局に吸収されて都市デザイン室になる。そこで仕事はやっていたけど、意気消沈しちゃった。

どうするかなって思っているときに、盛んに内藤さんが、「田口君、係長試験受けたほうがいいよ（注：この試験を通過しないと係長以上のポストにつけない、受験資格として在職期間の基準があるが大学院卒なので加算された）」って言うんだけど、1年目は断ってた。2年目になって受けてみるかなと思い始めた。でも、受かったらば外に出なきゃいけないわけ。一旦はね。それで受かって（注：一応建築職では一番だったらしい）、みなとみらいにポストがあるから、みなとみらい（注：都心臨海部再開発事業と言われていた、当時の組織上の筆頭部署）に行かないかといって言われたけど、みなとみらいはその当時、田村さんの構想を小澤恵一さんがめちゃくちゃにってしまった、と自分なりに思っていた。ちゃんと理解していないことを、後年建築学会の論文を書いて理解したけど。

青木 当時は。

田口 だから「あんなところに行きません」って言ったわけ。一応、筆頭セクションだから、それは断るはずがないと思っただろうな。そしたら行く処がなくて、港南区役所の建築課。建築基準法の確認申請やる処ね。そこしかないって言うから、逆にちょうどいいなと思った。

区の魅力づくりでやってきたから、そこ行ってまた同じことやっちゃおうなんて思ってた。

青木 それで新本牧で活動をされた。

田口 港南区に2年ぐらいいる中で、建築の確認申請という役所の本当の基本的な業務をやった。その係長というポストで、でも建築職だけ確認申請業務のこと何も知らないんです。建築基準法のぶ厚い本の解釈をして、いろんな建築確認をさばくのだけど、本当にやったことないから分からないわけ。ただし、ちょうどいいところに来たとも思ったから、区役所の企画調整係みたいな感じで、区長とか幹部連中とうまくやったわけ。職員たちもいい人たちだった。自分の体のほとんどは港南区役所の企画調整係みたいに活動した。その間に役所の海外研修制度（注：田村明が作って制度で、研修所が毎年職員から数名選定し数十万円の資金を渡し自分で訪問先を決め行動する）に応募して行った。それで1カ月ぐらいインド、バングラデシュ、タイ、インドネシア、フィリッピン、などを動き回った。それはなぜかっていうと YLAP があったから、それらの国や都市を見たいと思った。バンコクの ESCAP 本部も尋ねた。そろそろ辞めて国連でも行こうかなと思ってたから。

青木 そうだったんですね。

田口 役所はもういいかなと思って。そうしたら、岩崎さんに本当に誘われて、「田口君、ブータンに国連のポストあるから行かない？」っていうふうに言われて。ブータンってどこでしたっけ、ネパールの隣でヒマラヤの麓だった。そこへ都市と住宅関係の国連専門家として行くんだけど、君も建築出身で、少しは住宅関係も分かっているだろうから、と言われた。いいなという反面、子供もそのとき長女が生まれたばかりで、どうするか相当悩んだ。ちょっと自信がないことと、状況があまりにも変わり過ぎるんで、躊躇してそれは断った。

2年ぐらいたったら、小澤恵一さんがみなとみらいから都市計画局の部長に戻ってきて、小澤さんが私のことを心配してくれて、田口、平気かなってね。結局は小澤さんとか廣瀬良一さんとか、企画調整局の末期に私は一応形式上入っているから、それで心配してくれたらいい。田口はどうも建築の確認申請というルーティンの業務をやらなくて、どうも区役所の中で勝手なことをやっているらしい。そこで、2年たって戻してくれたんです。それで配属されたのが新本牧開発室です。

青木 そこでつながっていくわけなんですね。

田口 小澤さんって別に悪い人じゃなかったんだ、と理解した。

青木 小澤さんとは港南区に行く前から交流はあったんですね。

田口 交流はあった。田村さんが企画調整局長から左遷される直前に何回か飲み会やると、小澤さんはグリークラブで歌がうまいんで、よく歌っていましたね。経歴は細かく知らなかった。後になってだんだんそうか、農政部門にいて、いろんなことをやってきた人なんだっていうのは分かってきた。

青木 そういう形で。一人企画調整みたいなことしてる中で、思い出に残ってるような自分でやってた事業ってありますか。新本牧以前で。

田口 区の魅力づくりの一番は、大岡川プロムナードですね。大岡川の川沿いに安心して歩ける、レンガ敷きの歩道を造って桜を植えたものです。結果的に、わが家のそばですが。

青木 そうですよ。

田口 結婚して住んだのが井土ヶ谷（南区）で、その後に家を建てたのが弘明寺（南区）だから、わが家のそばなんです。子どもたちには、桜の季節になると歩きながら、これはパパが計画したと言っていました。家のそばの地下鉄の弘明寺駅にバス停があるんだけど、バス停の所にちょっと広げた広場、街庭と言っているけど、それを当時の土木事務所の係員の人と一緒に設計したりとかね。それは今でも残っている。

青木 そうなんですね。それは見に行かないと。

田口 思い出深いよね。

青木 長島孝一さんなんか也大岡川の。

田口 そうです。あれの実施設計をやったわけ。長島さんたちが（注：AUR建築都市研究所という事務所を楨文彦事務所から独立して作ったばかりだった）。

青木 その頃から長島さんなんかとも交流があったわけですね。

田口 長島さんたちの実施設計に至るまで、役所内でいろんな調整があるからね。それがなければ、ああいう設計はできないんですよ。長島さんたちは、俺たちが全部計画や設計をし

て全部できたと思っているけど、ああいう事業をするためには、市役所内の複数の部局や県も含む部署と色々な調整があるわけ。それを私があちこち走り回って、説得して、こういう事業費を付けるかっていう話に、やっとなるわけ。だから大変なんだ。

青木 そこが一番重要ですよ。確かに。

田口 設計すれば何でもできると思ってる人たちもいるけど、世の中は全然そんなもんじゃ回りません。いろんな人たちを説得しなきゃいけないし、周辺住民もいるし。いろんなことがある。

青木 そうなんですよ。そうした活動の中で、都市デザインというものに対する考え方は、横浜市に入る前と横浜市時代を通じて、変わっていききましたか。

田口 変わってきましたね。だいぶ変わったというか、より都市デザインというものが組織として動かなきゃいけないものであると。デザインというものはあるけど、やはり「仕組み(システム)」なんだっていうことをえらく感じた。その上の企画調整という構造がなくなって、仮に存在したとしても、いびつな存在なんだということは、よく分かったね。

青木 役所内の調整。さっきの大岡川の話もそうですけど、その部分が何ともしないとデザインだけでは動かないというか、その部分を非常に強く意識したということですかね。

田口 うん。

青木 ありがとうございます。新本牧のお話は今、書いてるものにも載せられるんですかね。その辺りでも、また一回ちゃんと読みたいと思うんですけども、その後っていうのは。要するに横浜市以降の、新本牧の後に横浜市。

田口 新本牧でやったことは、まちづくり協定というルールづくりでした。それ以外は、マンション開発指導や、センター地区の商業開発などをやったりして、新本牧開発室がなくなる最後(1989年3月)までいた。もう一つ大きなのがCATV(有線テレビ)の話ですね。ケーブルテレビの負担システムをつくった。つまり周辺が大きく受信障害になる。高層マンションの影響なんですけど、そのための対応の話。受信障害対応に止まらず、それを地域の新たなメディアとして活用するために、新たなCATVの財団法人を市が中心となってつくった。

元々は、ある職員が郵政省の許可もとらずに、新本牧全域にCATVの施設をつくってしまった。ケーブルはすべて地下埋設で、当時としては先端的施設だったけど、無許可ですか

ら行政的にはおおきな問題となる。ところが、同時に受信障害になることも分かったことと、たまたま郵政省から市に出向していた官僚が有能な人で、この問題解決を助けてくれた。でも、その話をつないでくれたのは、まちづくり研究会で一緒に学んでいた市の職員（石田正）だった。小澤恵一さんとも最先端のCATVを見に地方に出張して、小さな旅館の部屋に雑魚寝した。また、細郷市長の自治省時代の腹心の部下が中区長になっていて、その人とも交流して、自治省にもいい人がいるな、と感じた。でも、受信障害を新本牧地区内で中高層建築物をつくる地主に負担金を出してもらう訳だけど、簡単には了解してくれなかった。夜討ち朝駆けで地主さんの家に行って、縁側に座って待っていたね。また、今度は、地区外につくる受信障害対応のCATVの利用者からも月 200 円ぐらいの利用料をもらうのだけど、その説明会で「そんな大金払えるか」と大分怒られた。

でも面白かったのは、CATVの財団法人をつくる時に、その業界の大企業からも出捐金（注：しゅつえんきん、出資金のようなものだが寄附金扱いで返金されない）をもらうために、都内の超大企業本社を役所の一係長の自分だけで訪問した。それらの本社ビルのすごさには吃驚したね。このような時には通常、役所の幹部職員が行くわけだけど、当時一番分かっているのは自分だから、自分で行きますとした。その後、郵政省がCATVと都市づくりを融合させる施策作りの研究委員会を立ち上げ、横浜市からも課長クラス以上を出してくれと言ってきたけど、分かる人間は係長の私しかいません、と言って自分が委員になった。その委員会の委員長に田村さんがなっていて、これも吃驚した。その委員会の答申で、私が頑張ってしまうと、ついに郵政省が思う方向にならなかったので、その委員会答申はなしになった。また、米国大使館から、日本のCATV事業の方向性について意見を聞きたいので、大使館宿舎に来て欲しいと要請があり、行ったら当時のレーガン政権の長官に直接レクチャーする羽目になった。いろいろな思い出がありますね。でも、大分生意気な奴だと思われるたでしょうね。

青木 はい。

田口 CATVの財団法人をつくったことをベースに、まちづくりとCATVの在り方を理論化して、自分の博士論文を書いた。実際の研究作業は市を辞める1年前あたりからだった。新本牧の開発室が業務として終わって、次はみなとみらい会社に出向して、みなとみらいの実際の開発に関わるいろんな調整をそこでやってくれという話になった。そこに行ったら、高橋基雄がいた。新本牧で大蔵省との国有地三分割交渉（注：1980年代、本牧の米軍接收地が返還される中で、その域内の国有地を地元利用・国利用・留保地に三分割して、国に有利なように処分しようとした国の方針に市が反対した事案）をやった人間で、偉っぽい奴でいつもタバコを吸っていた。煙たいので彼の近くに行かないようにした。仕事はできんだけど、肌が合わないっていうか、そりが合わないっていうか。そんな中で、私がまだCATV関係の研究者や事業者とお付き合いしていて、アメリカのCATV視察団があるので、それ行きます

んかって話が出た。通訳やってくればタダで行けますというので、いいね休暇取って行っちゃうかって軽く考えたわけ。国内でも休暇取って自治体からの講演依頼で行ったことは何回かあるから。これが甘かったね。

役所って面倒くさいから、そういう話で要請を受けて行くときも、いろいろと邪魔する人がいるわけ。そうすると、しょうがないからみんな休暇取って行ったりする。みなとみらい会社に出向していた他の組織の人間だったらしいが、田口がタダで海外旅行に行っていると役所の人事に注進した。それで話が広がって、大変なことになった。私は1年もしないで、会社をお役ご免になって、あとは謹慎処分で1年ちょっと鶴見区にある本当に小さな運河を埋め立てる部署に異動になった。そのうち諦めて勝手に辞めんじやないかという話だったようだ。

当時は、ちょうど市長が代わった時期で、細郷市長が1990年に急死して元建設省事務次官だった高秀秀信が市長に当選した。人事としては、これは不祥事で賄賂に相当する、即刻首だというぐらいに息巻いたらしい。前から生意気だと目をつけられていたからね。ただ、自分から辞めるならば公にしないでやるって話だった。途端に私も火が付いて、私も公務員だから法律を勉強していた。なんでこれが収賄になるのか。普通は役所でも許可を取ればいいことで、そういう事例は当然ある。許可を取ろうとすると、みんな意地悪い人たちが許可を出さない。だから、休暇で行った。この論理もちよっと無理があるのだけど、公務員は24時間365日ずっと「公務員」なので、休暇中も公務員なんだよね。大学の講師とかの「兼業」はできるけど、役所の許可が必要となる。まあ、私の場合は「手続き違反」ですね。

そもそも、公務員の処分っていうのは二種類あって、手続き上の違反が「分限処分」となる。それは法令違反ではない。二つ目の「懲戒処分」は法令に違反した場合ですね。手続き上の違反だけだから、これ分限処分なんじやないかって頑張ったわけ。辞めろって言うけど、なんで自分が辞めなきゃいけないんだ、そんな濡れ衣を着せられて。手続き上のミスは確かにあるのは認めますと。

なんで自分が返さなきゃいけないのか、と思ったけど。旅行代金80万だというんだ、えらく高いなと思ったけど。うちの奥さんが怒りながらも、80万を主催者に渡した。でも通訳分の80万の費用は発生していないはず。団体の場合だと、1人か2人分がタダになるから。後で、あの80万どうしたのって聞いたら、みんなで飲んじやいましたって。

形式上そうだから、80万は返したけど、だけど辞めませんよって頑張った。盛んに小澤さんや元企画調整局の幹部の人たちが集まって、「田口君ね、辞めたほうがいいよ」と。中には就職先を紹介してあげるから、と言う幹部もいた。でも、それは結構です。就職先は自分で見つけますから、と断った。そもそも、自己都合で辞めれば退職金をもらえるが、懲戒免職だともらえない、と言ってね。でも懲戒免職になる案件じゃないから、私に分限処分をやっていただいて結構です。給料の何十分の一の削減っていうやつだけ。まずは謹慎処分となって、都市計画局の総務課の傍の壁に向かって、何も無い机に座って1か月ぐらいいた。トイレに行くときも断って行く、さすがに昼休みはあって近くの図書館でいろんな本を

借りてきて、それを読んでいた。都市デザイン担当の西脇敏夫さんが総務課に抗議に来て、こんな謹慎処分をなぜさせるのか、と言ってくれた。NPO法人をつくった時に、国吉直行さんから「君の事件で都市デザインは大変な迷惑を受けた」と言われた。

相当頑張った故に左遷になった。そのうちこいつは音を上げて辞めると人事は思った。でも左遷された事務所が鶴見区役所内にあったので、まちづくり研究会の若い人たちと楽しくやっていた。後で、田村さんが「あの幹部職員たち」にも田口君と同じようなことがあった、と教えてくれた。でも、ちょっと困ったことに、この事件を人事が新聞社にリークした。それで記事になったけど、各紙とも少し好意的で「あまりに処分が厳しすぎる」というものだった。でも、子供たちが学校でいじめられるかを心配したが、それはなかった。田村さんはいろいろと相談にのってくれて、私の奥さんが「うちの主人は悪いことをしたのでしょうか」と内緒で田村さんに相談に行った、と知った。心配をかけてしまった。まあ、この事件は自分の不注意から起きたことで、何を言っても公務員として身を正さないといけなさと感じますね。ただし、厳正な処分は当然甘んじて受けるけど、相手を脅して闇に葬るようなことは我慢できなかったですね。

鶴見の次は、都市計画局の金沢八景駅前の再開発事務所に異動した。ここは全く事業が当時、動かなかったわけ。事務所に7、8人いるんだけど、ほとんど仕事をしていない。そこだったら田口、嫌になるだろうっていうので、今度はそこに行ったわけ。ちょうど夏で、子ども連れてよく行った金沢八景の人工海浜がそばにある。昼休みになると事務所の自転車を使って、1人で潮干狩りに行って海に潜って。アサリなんか取ってきた。事務所のシャワー浴びて、晩御飯の材料を持って帰る、そういう生活をしていましたね。

そのときは既に、いろんな会社のインタビューを受けたりしていたから、もう辞めるのは時間の問題だった。そうこうしているうちに、今度は名誉回復になったわけ。それで当時の企画財政局の企画調整室だったかな。その責任者の人、何ていったかな。すごくいい人なんだけど、田村さんの時代の人だけ。その人が、「田口君、企画にそろそろ戻ってきなさい」と言ってくれたわけ。これで名誉回復になったなと思って、では辞めますとお答えした。名誉が回復されないで辞めるのは嫌だから。

青木　そうですよね。

田口　名誉回復になったから、「すいません、これで踏ん切りがつかしましたので、辞めさせていただきます」って。そしたらその人が、野毛の小さなお店で個人的に送別会をやってくれた。本当に残念だなんていうことを盛んに言ってくれたね。それで辞めたって感じだね。この話の仲介をしてくれたのが、まちづくり研究会で一緒だった石田正君だった。田村派の闘士だったが、早く亡くなってしまった。なお、役所を辞める時に、まちづくり研究会の仲間たちが中心になり送別会をやってくれた。百人ぐらい来ておおいに盛り上がった。残念なのは、寂しい会になるかと危惧して奥さんを連れて行かなかった。

青木 それでお辞めになって、新しく次のキャリアに移っていくわけですね。

田口 そうですね。次のキャリアに移っていくときも、個人的に知っている人たちのツテをたどっていった。清水建設本社の最先端の企画というか、ちょっと外れた企画っていうか、長谷川文雄さんというフューチャーリスト Futurist っていうらしいのかな。東大の先端科学技術研究所の客員研究員をやったり、米国に留学したりとか、この人は清水の人か、清水の人じゃないのかよく分からない人なんだけど。すごく面白い人がいて、その人をよく知っている連中が市役所にいて、私とつながっていた。それで、長谷川さんを紹介してくれることになった。自分で考えてプロデュースして、事業化に持っていくまでの仕事をしたい、と希望を伝えると。清水の中でいえば「開発営業部」という新しいセクションがあって、そこがまさにそういうことをやろうとしています、そこでどうですかっていう話になった。何やっていただいても結構ですとなって、そこに移った。清水建設の企画調整局みたいなものですね。

ただし、清水建設も不安だから、保証が欲しいんだよね。向こうから、田村さんにお手紙を書いていただくことは可能ですかっていう話になって、それで田村さんに書いてもらった。社長宛てにね。当然、田村さんの存在はみんな知っているわけなんだけど、田村さんが手紙を出す相手が、これは面白いふうを考えるんだなと思った。開発営業担当の部長さんが、「田口さん、これね、手紙をもらった相手が清水の中で長く生きられる。そういう人間に出していただいた方がいいですよ」と言われた。つまり清水建設の中でもいろいろ勢力争いがあるから。この人はもう駄目だとか、外れたとか、いくら表面上偉くても駄目なわけだ。それで、この人にしてくださいって言われてさ。それで田村さんがうまく書いてくれて、それで清水建設も安心した。田村さんは当時の会長以下の幹部社員を知っていたはずだが、指示の通りにした。

それで1991年、私を採って数週間ぐらい経って、それまでも田村さんからは年がら年中自宅や勤務先に電話してきたり会ったりしていたけど、会社に電話してきてくれた。「田口君、今、暇？」って言うから、「今、会社にいますけど」って言ったら、「今、行くよ」って。そしたら昼に来られたんで、本社ビルの最上階にある来客用の、帝国ホテルがケータリングやっているレストランがあるわけ。そういうのを大会社はみんな持っている。私が入ったときに頻繁にそこを利用して、いろんな友達を呼んで会食した。「田口さん、経費がだいぶかさんでいるんですけど」って言われたけど、それはそれとしてね。それで田村さんが本当に来ちゃって。そしたら部長がびっくりしちゃって。田村さんが本当に来ちゃったって。だからそういう関係だっていうのが分かったわけ。田村さんが心配する田村さんの子飼いの人なんだという印象付けがされた。このように、田村さんには全く頭が上がらないですよ。

青木 そうなんですね。田村明さんって横浜市に入った後、入る前からそうなんでしょう

けど、ずっと田口さんにとって大きな存在としてあり続けたわけですよ。

田口 うん。結婚（1979年）したときの頼まれ仲人でもあるしね。市役所を辞めるときも、そのときは簡単に考えていた。田村さんに頼めばいい会社を見繕ってくれるんじゃないかと思って田村さんに言ったら、そのときは怒られた。「田口君、そういうもんじゃないんだ」と。「転職っていうのは大変なんだ」と。「会社は自分で見つけなさい」と言われた。自分で当たりをいくつかつけて、後でそういう保証人的なことはやってくれる。これは圧倒的な力があるからね。日本社会って保証人がいないと駄目で、当然会社は裏取りするから。市にも聞いてきたらしいんだね。清水の横浜支店を通じて。企画調整局にいた人、誰かは分かっているんだけど、その人は非常に好意的に評価してくれたらしいね。

青木 そうですか。

田口 あの田口だったらいいですよ。そうじゃない人もいたかもしれないけど、良かったよ。

青木 清水時代には、まちづくりっていうのは意識はありましたか。ずっと。

田口 全くあるよね。最初にやったのは千葉市が1992年、政令指定都市になった時なんです。清水建設としては千葉市にさらに食い込みたいっていうのがあったわけ。幕張の開発なんかはやっているんだけど、それは千葉県企業庁の事業だった。もっと千葉の開発を千葉市と仲良くなってやりたい。いってしまえば、みなとみらいの三菱地所みたいなものですよ。だけど誰に言ったらいいのか、誰がキーマンか。これが民間の場合、いつも「キーマン論争」なんだけど、誰が本当に力を持っているのかっていうのがあるんですよ。市役所といたら首長が本当に力を持っているのか、その下の助役か、田村さんとか、あるわけでしょ。外部の人から見ても分かんないわけ。それが誰かというのを探らなきゃいけない。探って、その人に対して清水建設なるものが結構、総合力を持っていろんなお手伝いができることを伝える。

やはり知恵で勝負するということです。総合力はあると言っているけど、でも正直言っちゃうと、実はないんです。だけど、そういうふうに見せて入っていく。キーマンに対して、総合力があるらしいことを見せる。それで、私とその任務をやりましょうかって言って。まずキーマン探しね。これは結構、苦勞しながら探した。横浜のつながりのつながりで、千葉市で一生懸命やっている元気な役人を紹介してもらって。それでいろいろ話し込んだり、遊びに行ったりしている中で、だんだん分かってくる。あの人ですかねっていうのが分かってくる。それは市長ではないんですよ。助役でもない。

青木 そうなんですか。

田口 うん。ちょっと外れたところにいる、ある人なんですよ。私なりに仮説を立てて、最後に「あの人は誰か」って言ったら、「えって」話になって、「よく分かりましたね」となった。

青木 そうなんですね。

田口 そういうものを探していくわけですね。市への提案書は、ダイアグラムみたいな挿絵も描きながら自分で作成した。千葉市の課題っていうのは大体、分かるので。そういうのを概念的なものとして、プレゼンテーション用にきれいなやつを、ちょっとした冊子にして作ったわけ。そしたら清水の中で、これは誰が作ったんだって話になって。清水の文化ではこれほどのものはできない。「私です」って言ったら、すごいねって話になった。

そんなことはやりましたけど、それをやっても、にわかには役所から工事の発注が増えるわけでもない。そこで、私は業界研究をやりたいっていう話を出した。それぞれの業界で清水がなんらかの役に立つことを示して、それで最終的に建物の工事もらう。という新たな進め方をしたい。それで、アパレル業界と物流業界にまず取り組んだ。アパレルと物流をすごく勉強して。業界の専門新聞があって、各業界で本を書いたりしている人の所にどんどん行って、いろんなことを教えてもらった。人を紹介してもらったり、なんだかんだって、よくやってたよね。オンワードの幹部会に出て挨拶させてもらったり、イトーヨーカ堂の次のナンバー2は誰かとかを探したり。アパレル物流の大阪の会社と親しくなったりした。そんなことやったね。それも業界新聞の編集長が私の取り組みを気に入ってくれたお陰でした。

青木 社会派というか、業界研究ですね。

田口 そんなことをやっていたんです。何年かやったけど、仕事になかなか結び付かない。これは建設会社的には、まずいなと思い始めてチェンジしたのが教育なんですね。教育業界だったら校舎などの建物が出るだろうという話ですね。

青木 それで学校教育が出てくるわけなんですね。

田口 そう。それで教育業界にシフトして、まだ役所にいた南学さん（注：後に田口からの情報で浜松市にできた公立大学の教授に転出する）とその当時から一緒に勉強したりした。そうすると、教育業界でいろいろと裏でプロデュースする人たちがいることに気が付いた。また当時、南さんは調査課長で『調査季報』の特集で、役所から民間企業に転職しながら博士号をとった人がいるとして、私を囲む座談会を設けてくれた。なんとなく、役所でも名誉

回復された気がした。また、内藤惇之さんと石田正が中心となり役所の友人たちで祝賀会をやってくれたのも、実に有難かった。

青木 教育業界をプロデュースしてる。

田口 裏でね。それはいってしまうと、大手学習塾や大手予備校があるけど、もう一つは意外や意外、事務機メーカーさんとか。事務機のメーカーさんにそういう人がいるわけ。他にコンサルタントでも、文部科学省に対する大学設置などの申請業務をやっている機関がある。それで、そういう人たちと付き合うわけですよ。これ以上は言えないような話がいくつもあって。例えば学校法人の買収とか、そういうこともやるわけ。学校法人を買収するのは。大変なんです。いつとき私が、東京の私立中学高校協会の会長さんの学校の専属顧問もやりましたね。

青木 そんなことまでされてたんですね。

田口 その方は偉いんです。ご自身の学校はほとんどつぶれそうだけど、東京の私立中高協会の会長で東京都の学校審議会の会長でもある。週のほとんどはその学校に行っ、ほとんど会社なんか行かない。家から学校行って、会長と帰りは酒飲んで、そのまま家に帰ってくる。忘れられないように、たまに会社にちょっと寄って、一応まだ辞めてませんと顔出して。今で言う「リモート勤務」なんだけど、なにしろ実績を上げないと明日はないわけで大変でした。つまりそういうとこまで入り込んで、なんだかんだやって建築工事につなげる。あとは大手某予備校のために学校を買収したりもした。その予備校が先進的な中等教育をやり、卒業生を海外大学に進学させたいというので。予備校なのに、日本の大学を評価していないのが実態でしたね。まあ、このような仕事も、すべて人的ネットワークが財産で、それでやっていました。ある時は、イギリスの中等教育の伝統校を見て回るツアーを、会社の調査研究費をもらって、友人の教育関係者と一緒に行きました。メンバーの一人がレンタカーを運転してくれて、楽しかったですね。その一環で、某超伝統校を訪問することができて保護者にも話を聞くことができたのだけど、メンバーからどうやって田口さん許可をとったのですかと聞かれた。我々は日本の将来を担う若手教育関係者で新たな学校づくりを目指している、と伝えてあったからかもしれません。

青木 でもその辺りってというのは、全然これまでお会いした中で聞いたことがなかったお話なので、そういったことにも携わっていらっしやったのですね。

田口 50 歳代になってそろそろ定年が近くなって、清水にこのままいてもしょうがないと思いはじめた。それで横浜山手女子学園（中区山手町）の教頭さんになった。横浜山手を吸収

合併して、中央大学の付属校にするのも、あれも似たような話です。中央大学から附属校戦略づくりの調査委託を受けていて、それで丁度横浜山手と結び付けた。当時活動する名刺は、NPO法人の生涯学習＝大学人会議という高等教育関係者の団体の客員研究員でした。面白い縁は、その理事長が浅田敏雄さんで、田村さんが勤めた環境開発センター所長の浅田孝さんの実の弟さんです。医者で東邦大学の学長をやり文科省の大学設置審議会の会長を長年やっていた。大学業界のドンですね。その番頭さんが森山さんといって、南さんの紹介で知り合った。

青木 そうだったんですね。教頭になる前にされてたことと、教頭になるまでの間になにかつながりはあったんですか。

田口 横浜山手女子学園は外から見ても、生徒募集で困っていることは分かっていた。山手の丘にはあるけど、存在感がない学校になっていた。そこで、友人の山手外国人墓地の管理委員会の委員を通じて、学園のキーマンに会いに行ってもらった。外国人墓地管理委員会の委員は横浜では名士だから、だいたいの方は会ってくれる。それでコンサルになった。有料だけど値切られてしまった。本格的な国際教育（注：国際バカロレアIBという国際標準の中等教育制度を導入した）をちゃんとやったらいいですよって提案をした。そうしたならば、誰がやるんですかって言われて。うちの学校にはそんなことできる人はいませんって。田口さん、やってくださいって言うんで。私ですか、私は清水建設に籍があるんで、と一旦固辞したけど。でも清水建設も辞めどきだからいいなと思って、辞めちゃった。

青木 そのまま教頭になっちゃったんですね。

田口 そう。その国際コース専属の教頭先生です。でも、そのコースにあまり生徒が集まらないんで、中央大学から来た校長が結果的に二年でお取りつぶしをした。中学1年生と2年生がいたが、子供たちと保護者には申し訳ない。でも、丁度その頃になって、文科省が国際バカロレアの導入を国策として推進し始めた。全国の公立や私立学校で、同じコースが出来始めた。もうちょっと遅ければ、自分たちのコースも生き残った可能性がおおきい。なお、横浜山手女子学園は中央大学の附属校となったが、アホな大学の理事長の判断で山手の丘から港北ニュータウンに移転した。山手の丘にいた方が、校舎が狭くても格式が保たれステータスが高くなったのに残念です。後日談があり、その理事長と校長が絡んだ不正入試事件があり、二人ともに辞任した。

青木 そうなんですね。

田口 お取りつぶしになって、中央大学で世話になった人から「田口さんご苦労様、もうう

ちを辞めてもらってかまいません」と言われた。他の学校のコンサルやったら、という意味だったけど、生徒たちへの贖罪の意味もあって横滑りで、新しい学校の事務のおじさんになった。生徒たちが卒業するまでいようと思って。生徒たちの思い出の一つに、中央大学から来た校長に「あんな馬鹿な生徒たちには国際教育はできない」と言われたけど、残った生徒の一人が附属中学校高等学校の生徒会長に高校 3 年生の時になった。彼女は立教大学から楽天グループ株式会社に入社した。子供たちはバカと言われても可能性は無限大だと思う。

青木 清水建設から学校教育のコンサルタントやってた時期っていうのは、そんなに都市とか街とかいうのは前面に出てきてないように感じるんですけど、その時代っていうのはそういう時期だったんでしょうか。田口さんにとって。

田口 そうですね。研究もやってないしね。博士号を取ったのは清水に移って2年ぐらいだった 1994 年だった。論文博士ですね。それはなぜかっていうと、横浜市を辞めるときに、こんなことで辞めちゃうのも残念だなと思いながら、本牧でやった事案を発展した論文を書こうと思立った。それで博士号でも取れるんじゃないかと割と軽く考えて。そのためには学会に論文を継続的に発表しなきゃいけないというので清水に移ってからも、別段、決まった仕事があるわけじゃないから、よく図書館に行って論文を書いていた。結果として、清水建設から報奨金で 10 万円もらいましたね。

そのとき、早稲田大学の戸沼幸市教授が博士号を取るときの窓口だった。その先生が博士号を取ったから、ポストを用意してあげるっていう話になったんだ。国立三重大学のポストを持っていて、三重大学で何年かやらないかという話になって。普通だとみんな、先生ありがとうございますっていう話になって、何年かやれば早稲田に戻ってこれるという話らしい。だけど大先生方の丁稚奉公みたいなこともあるし、自分は趣味で博士号を取ったわけだから、私いいですって断っちゃった。それで清水建設にずっといることになった。

青木 そうだったんですね。

田口 そしたら先生、ショックで。こんなにいい話を断る奴がいるのかという話になっらしい。子供たちのことを考えると、三重に引きこもるのも問題がありそうで。だからお断りしましたね。それで一応、教育の場に戻るのとはなくなった。

青木 その時期、都市については区切りを。

田口 うん。一応、終わりと。

青木 清水建設のほうの仕事に、主な関心が移ったんですね。

田口 そうだね。

青木 最終的に先ほどおっしゃってたように、学校の中で事務をすることになるぐらいの時期に、多分、私、初めて田口さんにお会いしたのですね。

田口 そうです。結局、そういうふうにして、教育コンサルで生きていこうと思っていた。新しい国際教育の話があると、そういうところで自分も役に立つんじゃないかと思っていた時代があったけど、なかなかそう簡単にもいなくて。そうこうしているうちに、田村千尋さんが田村明さんの残されたスライドをどうするかという話になって、スライドを捨てるか捨てないかという話の中で、私もそろそろ田村さんの研究をしたいと言って、そういう任意研究会つくって将来的には NPO 法人をつくろうという話になったんだ。二年ぐらいの準備期間を経て 2015 年 4 月に NPO 法人を設立した。横浜市の認可 NPO 法人となる。

青木 それが 2013 年。

田口 それまで田村さんの研究は誰もやっていなかったから。

青木 研究をしようと思ったのは 10 年ぐらいですかね。10 年ちょっととかですね。

田口 2010 年に田村さんが亡くなって、遺品整理をし始めた頃だから、そういう辺りですよ。遺品整理で蔵書を全部、市史資料室に寄贈するというのをやった。あとスライドをどうするかという話になって、やはり田村さんをちゃんと研究したほうがいいんじゃないかと、ふと思ったんだ。田村さんのことや業績は分かっているようで、分かっていないわけだから。因みに、田村さんが亡くなった 2010 年には、仲原さんと伊豆のマンションにすぐに駆け付けたけど、葬式と告別式にはわずかな人しか参列しなかった。仲原さんが葬儀の段取りをすべてして、私は奥様と千尋さんに付いているだけだった。当時はまだ学校の教頭だったので、学校からすぐに帰れと言ってきたけど、私がいなくても学校は回りますから、と返事した。その後の「田村さんを偲ぶ会」も仲原さんがすべて段取りをした。我が家は奥さんと娘たちが手伝ってけど、仲原さんのオーガナイズ力は素晴らしいね。

青木 田村さんとは清水建設時代も、それ以降もずっとお付き合いが続いてたわけですよ。

田口 ずっと付き合っていますよ。月に 1 回の田村塾っていうのも当然行くし、田村さんとほとんど毎週のように電話で話してるし、週に 1 回は最低会ってる感じじゃないかな。お茶

したり、お酒飲みに行ったり。あと自治体学会ね。役所を辞めてからも自治体学会に私も参加していたから。田村さんとはずっと付き合っていたんだよね。横浜に対する関心、自治体に対する関心、まちづくりに対する関心は少なからず持っていたんだよね。ずっとね。

青木 ずっとあったわけですね。その中で千尋さんとかと初めて会ったっていうのは田村塾ですか。

田口 そうです。田村塾で。そこに毎月1回私も参加して、そこで千尋さんも参加されるようになって。

青木 そしてNPOの立ち上げに、その後つながっていったということですね。

田口 そういうことですね。

青木 ようやくそこまでの経緯がしっかり。そのとき以来横浜市にこだわって活動を続けているように思いますけど。

田口 全くそうですね。

青木 それにはなにか理由があるんですか。

田口 横浜市のことですと、やはり自分が不完全燃焼だからね。そこに尽きるよね。もうやり切ったっていう人だったら違うだろうけど。全然やり切っていないんだよ。

青木 そうですね。今もいろいろな課題が出てきますもんね。

田口 全然やり切っていないから、そういうことなんじゃないのかな。かつ今も横浜に住み、子どもたちも横浜で育ち、奥さんも横浜の人だし、横浜というものに対する愛着はずっとある。仲間連中が横浜市で頑張ってやっていた時代をずっと見てるわけなんで、横浜に対する思い入れはずっとあるんだよね。

青木 その後、NPOの活動っていうのは、私も半分以上ぐらいはなんとなく一緒に携わったので分かってるんですけども、今はずっとお聞きしたいことはだいぶ伺って、知らなかった部分がかかなり多かったのもあって、とても興味深かったです。今回のヒアリングで最後の質問としては、今、ご自身としては何を目標しているのかを、あらためて伺いたいんですが。

田口 やはり横浜と田村明を世界で認知してもらおう。認知したからどうかっていうのはあるけど、それに尽きるよね。そのときに自分の存在を認知してほしいかどうかって聞かれると、あんまりそういう感じはないんだよね。

青木 そうなんですか。

田口 うん。横浜と田村明が認知してもらえることに努力したオジサンがいたっていうことでいいと思う。

青木 あんまり自分語りはしないんですね。自分のことを語るというよりは、田村さんを語り、横浜を語るという。

田口 そう。割と性格的にそうなんだろうね。自分のことはあまり語らないよね。この前、イギリスの雑誌社から、田村さんについて書いたプランニング・パースペクティブズ Planning Perspectives (注：イギリスに本部がある International Planning History Association, IPHS, 国際都市計画史学会の機関誌) の論文(The post-war rebirth of Yokohama: the planner Akira Tamura's contributions to municipal reform)が、ビューアーが61ありましたと報告があった。ビューアーっていうのは何をしてビューアーっていつてるのかよく分かんないんだけど、金を払って論文をダウンロードした件数を言っているんだろうなって。あれ5000円くらいするじゃない。そうすると61ありましたっていうと、あったほうなのか、なかったほうなのかよく分かんないけど。見てくれている人はいろのかな。だからこれからも、どんどんアピールしていきたいと思いますね。

自分で出版したのは唯一、本牧のCATVの本だよ『CATV 奮戦記』(石田正・田口俊夫・岡本孝夫, 公務職員研修協会, 1988)。でもあれは、新本牧での話であれ以上はないんだ。もっと大きなのは、我々が生かされている横浜という場所。飛鳥田さんという存在。田村明という存在。企画調整という大きな中で生かされていて、それをなくして、俺は偉いんだぞって言ったって、なんの意味もないよね。空虚なもんだよね。

青木 その辺りを明らかにしていく。世の中に知らしめるというのが重要だという考えなんですね。

田口 そうですね。そういう風でいいんじゃないですかね。

青木 どうもありがとうございます。田口さんは自分についてあまり語らない印象があったんですけど、今日は個人的にはすごく興味深く。田口さん自身がこれまで携わってきたことだとか、都市とか、街とかいうことに、どういう思いを持っていたのかについて興味深く

お話を聞いておりました。ありがとうございました。